

三万本の掲示板

渋谷直蔵

大平さんと私との最初の出会いは、昭和三十五年である。私は当時労働省の労働基準局長であつたが、秋に予想される衆議院の総選挙に出馬する決意を固めて着々準備を進めていた。当初、当時通産大臣であつた池田勇人先生に紹介され、池田先生も全面的に応援するということで激励を受けた。ところが、その後池田内閣が成立して情勢が急変した。というのは、私と同じ選挙区から大蔵省OBの某氏が出馬することになり、宏池会はその某氏を応援することになつたため、私は見放された格好になつたのである。

労働省の労政局長であつた高樫総一先輩が心配されて、大平官房長官と一橋の同期生で親交のあつた関係で、大平さんと話し合う機会をつくってくれた。その時の大平さんは、例の如く口数も少なく、とつとつと話してくれたが、後輩に対する温かい思いやりは十分にくみとることができた。

次に、昭和五十二年十二月福田第二次内閣の発足に伴い、私は党の広報委員長に就任した。大平さんが幹事長で、それから一年間私は幹事長と一緒に仕事をさせていただいた。党の広報活動の強化は、党近代化の大切な柱であるという信念の下に私は全力を尽したが、大平幹事長は私の考え方に深い理解を示され、激励してくれた。

当時自民党は、政権党でありながら党の広報掲示板を持たなかつた。驚くべき怠慢という外はない。私は広報活動強化の支柱として、全国に広報掲示板をつくる計画をたてた。問題は経費である。三万本の掲示板をたてる」とすると、一本一万円として三億円かかる。党の財政はきびしいので、関係者はなかなか了承しない。そこで私

は大平幹事長に直訴してこれの実現をお願いした。大平幹事長は直ちに決断を下し、ゴアのサインを出してくれた。おかげでこの計画は二年間で実行され、現在は全国どこの地区にも自民党広報掲示板が見られるようになった。私としては忘れることのできない政治家大平さんの一面である。

昭和五十三年十二月七日第一次大平内閣が成立し、私は自治大臣・国家公安委員長・北海道開発庁長官に就任した。宮中での認証式のとき、若干の待ち時間があった控えの間で雑談していた。大平さんが真つ先に内閣総理大臣の認証を終えて帰ってこられた。そして大平総理が私を招いて、来年六月に東京サミットが開催される、もちろん日本としてははじめての世界的行事であり、何としても成功させなければならない、については心配されるのは訪日される先進国首脳の警備である、万が一不幸な事故でも起きたら、内閣はもちろん日本の威信にかかわる大問題になる、については国家公安委員長として万全の対策を講じてほしい、とのことであった。

一瞬私は水でもあびせられたような緊張感に、身の内が引きしまった。大平総理の期待に応えて、東京サミットの警備の万全のために、生命がけでがんばろうと決意した。いろいろと苦労はあったが、東京サミットは何らの事故もなく無事終了することができた。サミット終了後はじめての閣議で、大平総理から警察の努力と精進に感謝するとの発言をきいたとき、私は思わず目頭が熱くなるのを禁じ得なかった。組閣の第一歩から東京サミットの成功に献身された大平内閣総理大臣の真剣な政治姿勢を終生忘れることができない。

その他、地方分権や田園都市構想、更には政治の倫理化に示された大平総理の卓見と熟意についての想い出はつきないが、紙面の都合で省略せざるを得ない。大平さんは、深い思索に裏付けされた哲学を持たれた偉大な指導者であった。中道にして倒れられたことは痛惜の至りであるが、これもまた天命といふべきであろう。

生前のご厚誼に深く感謝し、心からご冥福を祈ってやまない。

(衆議院議員・第一次大平内閣自治大臣)